

自然での遊びを通して気づいたこと



新田児童館 館長 小野 義彦

この頃の子どもの生活には、昔と比べて大きな変化があります。

生活の中に自然な遊びがなくなってきたことです。第一は遊びの時間も少なくなったことで、特定の価値観のもとに勉強を強い、塾へ通わせ、そのために放課後の遊びが消え去ろうとさえしています。

昔から、子どもは遊びの中で成長してきました。無心になって遊ぶ中で魂を開放し、エネルギーを発散し、汗ばみ、工夫し、困難にも耐え、仲間と仲良くしていく生き方を身につけてきました。ところが、その遊びの質が変わってきています。これが二つ目の問題点です。テレビにかじりつくことが生活態度を受身にして無行動をつくり、パソコン・ゲームは遊びを孤独にしています。遊びの原理ともいべき社会性の発達、自立能力の発揮も、身体的発達も、総合的な活動能力なども、最近の遊びの中では見出しにくくなりつつあります。

従って、遊びの面からも、自然を取り戻す努力が必要になってきています。あえて文明から遠ざかってみて、山・海での野外活動的な生活に挑んでみるのが、今の子ども達にとって大切であり、たとえ、それが1週間前後の期間であったとしても、その体験が、結果として満足感や達成感を得たものであれば、子ども達の成長過程に大きなよりどころを与えることになると思います。しかし、そのような体験は、一人で行うことは困難です。それゆえ、皆で集団生活を通じて体験する試みが必要で、だれもが挑戦しているのだという環境におくことが大切と思います。

かつて、ある中学校で、とても元気の良い生徒たちとサバイバル体験をしたことがあります。人家の

灯り一つ見えない海辺の林の中でテントを張り、各自にろうそく一本と毛布一枚を与え、3人一組で一夜をテントの中で過ごさせたのです。初めて経験する暗闇の中で、子どもたちは恐ろしくて思い思いにろうそくを灯していました。しかし、ろうそくが短くなりはじめると、3人が持っている物を一本ずつ灯して長持ちさせることに気付いたようです。暗闇の恐怖から脱出するために、ちょっとしたことですが知恵を働かすことが出来ました。そして、共同や協力の意義を、身をもって悟ることが出来たようでした。

また、毛布一枚では寒くなり、2人一組になって二枚の間に仲良く寝る者もいました。そして、ふと目が覚め東の空が明るくなって来た時、恐怖と不安から開放された様で、暗闇の中で一夜をすごして初めて電灯のある生活の有難さがわかると同時に、テント張りから飯ごう炊飯やマキ集めなど、それにろうそくや毛布の共同使用など、仲間同士が協力しあうことの大切をおのずから習得したようです。その後は言葉使いや行動面も立派になり、あれから26年、結婚し子どもも出来、今でも連絡を取り合っている可愛い教え子達がいます。

